

「心豊かに、生きる力をはぐくむ教育の研究」

～学ぶ意欲を持ち、共に学び合う集団の育成を意図して～

I 研究の内容

本県は学校教育指導重点のひとつに「確かな学力の育成」を掲げ、「学力向上対策」に取り組んでいる。市教育委員会もそれを受け、「確かな学力」育成プロジェクトを3年前に立ちあげ、今年度からは2サイクル目の2年間の取り組みが始まっている。主体的に学習に取り組む態度の育成、思考力、判断力、表現力の育成、さらに学習意欲、学習習慣、家庭学習の課題点を洗い出して本市児童生徒の確かな学力の定着・向上を図るプロジェクトである。また、本校は本年度、特に「授業の構造化」を研究の中心とした。これは、全国学力把握状況調査において平均得点が高い（特にB問題）学校と授業展開のクロス集計の結果を受けたものである。それによると、得点率の高い学校は、①授業の始めに「授業の流れを説明」し、授業の終わりには一時間の学習内容を「振り返りまとめる時間」がある。②授業展開の中に「言語活動の充実」に相当する話し合い活動がある。の2つを実践していることが明らかにされた。また、教科教育の第一人者の先生方もQ-Uで言うⅡ群、Ⅲ群の生徒を軸にした授業展開をしていく必要があることを示唆している。以上のことから鑑みると、本校の指導重点である「学ぶを知る」を具現化していく方法として、適しているのが「授業の構造化」であり、全校一丸となって授業実践してきた。

本年度の研究目標を説明すると学級集団づくりを基盤として、学力向上を目指していくものである。理由は、学級集団と学力向上の2点に相関があることが明らかにされており、先行研究からも学級集団が良好であると生徒の本来持っている能力以上に学力が向上し、定着することがわかっているからである（オーバー・アチバー、アンダー・アチバー）。

また、本校では学級集団づくりの方法として、生徒の社会性を身に付けることを目的とし、対人関係の形成に一定の効果が報告されている「ソーシャル・スキル・トレーニング（以下 SST と表記）」や「構成的グループエンカウンター（以下 SGE と表記）」をはじめとしたグループ・アプローチを導入した。これは、指導重点である「人を感じる」に相当する取り組みである。

本校の教育活動の一環である「学ぶを知る」「人を感じる」の具現化を図り、「一歩前へ」を合い言葉として、学級や学年など、共に学ぶ仲間との関係を構築していくための授業や諸活動の充実を目指し、「学ぶ意欲を持ち、共に学び合う集団の育成」を図るための取り組みとして、前年度までの研究を引き継ぎ、以下にある研究の柱を設定し、研究を進めてきた。

II 研究の柱となる具体的内容と方法

1 意欲的に学ぶ集団づくりに関わって

- (1) 学びの場として、基本となる授業規律の確立。（SST）
- (2) 「hyper-QU(よりよい学校生活と友だちづくりのためのアンケート)」の実施と分析(K13 法)・活用。
- (3) 「話し合いのルール」を生徒会と連携して周知→「学びの集会」を実施。（学ぶを知る）
- (4) 学級集団におけるルールとリレーションの育成。（人を感じる）

2 各教科における現状の把握とそれに伴う指導方法の改善に関わって

- (1) 各種検査、試験の分析による生徒の実態把握と指導方法の改善。（Q-Uの活用）
- (2) 各種検査、試験の分析から課題をとらえ「ステップアップ授業」の授業研究に活かす。
- (3) 「hyper-QU」による集団分析→集団の型に合った授業を仕組む。（授業の構造化）
- (4) 実技教科における指導目標の明確化。
- (5) 評価方法の検討。

3 学びの主体となる生徒の「質的」向上に関わって

- (1) 学力向上への取り組み（家庭学習の習慣化とステップアップノートの活用）。
- (2) 道徳教育の充実による生徒の情操の育成。
- (3) 国語力向上の取り組みの継続。

4 研究授業の実施

上記1～3に対して、研究の検証の場としてそれぞれ研究授業を実施した。

- (1) 意欲的に学ぶ集団づくりに関わる授業実践→10月実施・特別活動
- (2) 授業づくり，授業改善に関わる授業実践 →7月実施・国語科
- (3) 生徒の質的向上を意図した授業実践 →11月道徳授業参観，1月実施・道徳
- (4) 全職員が一人一実践として、「ステップアップ授業」を実施。

III 成果と課題

1 成果

hyper-QU を年2回実施後は「K13法」を用いて、学級集団アセスメントを行い、全教員が対応策や指導支援に関わる「引き出し」を共有化し、具体的な方策として、以下を実践できた。

- (1) 学級の状況に合った学級集団づくり（対人スキルの育成をねらいとする）のために、全校一斉に、意図的・定期的にSST,SGE実施した。
- (2) 学級の状態に合った授業づくり（授業スキルの育成をねらいとする）のために、「①縦型と横型によって、授業スキルを変える」，「②授業の構造化（ルーチン化）」，「③Q-U式座席表の活用」，「④電子黒板の活用」など授業実践を行った。

以下は、授業の構造化の構想図である。

「まさか」に
対応できる生徒
の育成

- 1 「学ぶを知る」
- 2 「人を感じる」
- 3 「勇気を持つ」

授業の構造化

①授業の構造化：導入～展開～まとめ

- 合意形成(『本日のメニュー』) ⇒見通し学習
 - 復習の場面(『本日のキーワード』)⇒振り返り学習
 - 授業デザインシートに**キーワード**，**宿題**を記入
- ②一斉授業⇔個別学習→ ペア学習・グループワーク
→ 言語活動の充実

hyper-QU のプレ・ポストの結果を比較検討したところ、学級満足群に所属する生徒の人数は、全国平均35%に対して、70%以上に達している。このことは、全校体制で学級集団の状況に合ったSST,SGEを学校体制で意図的・定期的に実施してきた成果と考えられ、学級集団づくりに対しては、本年度も概ね成果をあげられたと考えられる。

標準学力検査NRTとQ-U検査とのクロス集計から、学習支援の一次支援レベルにおいて、3年生は69.9%→70.3%へ上昇した。（全国平均は52.3%）。学校生活の一次支援レベルでは、1年生は78.7%→82.7%，2年生は81.0%→86.2%へ上昇，3年生は77.6%→75.5%となったが、全国平均は49.8%であるため、十分に成果はでていると考えられる。

2 まとめと課題

授業改善である「授業の構造化」を全教科共通で実施したことで、教科に関する調査結果や生徒の家庭学習の様子から、本校の課題の一つであった家庭学習の定着が改善され学力向上を見取ることが出来た。この研究を継続していくことが重要である。

(研究主任 藤原祐喜)